

転生者は無能と追放されたが新たな仲間達と冒険します。

北方守護

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1人の人間が命を落とした……

それを知った女神によって彼は異世界に転生された……

だが、彼には彼自身や女神も知らない秘密があった……

目次

第2話	第1話	第0話
7	4	1

第0話

ある日曜日……

「おいっ！早く救急車を呼ぶんだ!!」

ある街の交差点で1人の男性が交通事故にあっていた。

(ああ……久し振りに外に出たと思ったら、こうなったか……まあ、俺がいなくなっても悲しむ人もいないからな……)

彼の職業は小説家で最後の作品を出版社に出しに行つた帰りに事故にあつたのだつた。

そのまま彼は、その生涯を終えた……筈だつた。

「ん……あれ？ここってどこだ？……それに、なんで体が……」

「気が付きましたか」

彼が目を覚ますと周り全体が真っ白な空間でそばに長い紅い髪の毛のスタイルの良い女性が立っていた。

「え？今の声は……(はあ……綺麗な人だなあ……それに凄いスタイルだなあ……)」

「ふえっ!?その……褒めてくれて、ありがとうございます……」

「ん？今、俺って感想を言つたっけ？」

「いいえ、それは私が貴方の心を読んだからです」

「俺の心を読んだって……もしかして神様とかだつたりします？」

「はい、私は神の石柱です。貴方達が知る名前だとエオスと言う方が知られてるでしょう……」

「確かギリシャ神話の太陽の女神だった様な……」

「ええ、その解釈で合ってます……それよりも、よく私の事を知つてましたね」

「以前、執筆する時に調べた資料の1つにあつたからです……それでエオス様は何故、こんな所に？」

「はい、それは……実は、貴方は本来あそこで命を落とす事は無かつたのです……」

エオスは事情を彼に話し出した。

それによると……

彼女の部下の天使の1人が人間の寿命を記した書物を管理している最中に間違つて彼の所を消したとの事だった。

「じゃあ、それで俺が今ここにいるんですね」

「はい、彼女は直ぐに謝罪に来たのですが……一度消えた者は復元出来ないので……」

「そうですか……まあ、その失敗した彼女?には気にしないで伝えてください」

「え?……あの、怒つたり、恨んだりはしてないのですか?……」

「うーん……誰でも失敗する事がありますよ……だから、これから同じ事をしない様にしてくれたら俺は良いですよ……」

「貴方は変わった人間ですね……では、私の方から謝罪として新たな命を与えます……」

「え?新たな命って……一度消えた者は復元出来ないんじゃない?……」

「はい、本来いた世界には出来ないのです……ですので貴方には違う世界で転生してもらいます」

エオスが空間に手を翳すと一枚の扉が出て来た。

「違う世界で転生ですか……それは、どんな世界ですか?」

「はい……その世界では人間と違う種族が存在しており怪物や魔法などもある世界です」

「怪物や魔法がある世界か……じゃあ、「ちよつと待つてください!」ん?……どうかしました?」

話を聞いた彼が扉に向かおうとしたのをエオスが慌てて止めた。

「その世界は貴方がいた世界とは全然違います!今の貴方が行ったら直ぐに命を落とします!!」

「けど、俺は普通の人間だから、しょうがないですよ」

「私の話を聞いてください!だから貴方には私から幾つかの特典を与えます!!」

エオスが彼に手を翳して何らかの言葉を唱えた。

「私からは【鑑定】【無限魔力】【限界突破】【全属性魔法】【錬金】【収納BOX】のギフトを与えます、これだけあれば、そう簡単に命を落

とす事は無いでしょう」

「はあ、ありがとうございます……それじゃあ……へチャリ〜ん？ エオス様何でコレがあるんですか？」

彼が扉を潜ろうとした時にポケットに何かがある事に気付いたので取り出すと中央に大きな丸があり丸の周りに6つの三角があるキーホルダーだった。

「それは……私もわかりません……けど、こんな所まであると言う事は、それは貴方にとって無くてはならない物なのかもしれませんね……」

「そうですか……まあ良いか、それじゃあエオス様、本当にコレでお別れですね……ありがとうございます」

「いえ……こちらの方が迷惑を掛けたのですから気にしないでください……それでは……」

エオスは彼が扉に入ったのを確認すると自分もその場から姿を消した。

第1話

彼が新たな世界に転生してから年数が経ち25歳になった頃だった……

「オイッ！タケアキ!!今日でお前は追放だ!!」

リヨダリ王国の東部にある街の1つ【クリニエーラ】の酒場である冒険者パーティーがタケアキと呼ばれている青年を追放させようとしていた。

「ん？追放って……俺の事か？」

タケアキはパーティー内では【ポーター】のスキル持ちであった。

「ああ！今日の戦闘でもお前は役に立たなかつたじゃないか!!」

彼はパーティーのリーダーで名前をミュルと言い【剣士】のスキル持ちであった。

「確かにミュルの言う通りだな……タケアキは後ろの方にいたな」

彼はパーティー内でタンク役でもある【盾使い】のスキル持ちのエスカと言いいミュルの意見に賛同した。

「おいおい、俺はポーターなんだから後ろにいるのは当然だろう？」

「それで他のメンバーに迷惑をかけてるだろう!!」

「じゃあ聞くが俺がどんな迷惑をかけたんだ？」

「ウチの回復役であるクーラが常にそばにいるじゃねえか!!」

クーラとは【聖女】のスキル持ちの女性である。

「それは当然じゃないか。クーラが前に出てケガを負えば回復出来る奴がいなくなるかもしれないだろ。」

第一クーラ程のレベルがあるなら遠距離からでも回復魔法を使える」

「それだけじゃねえ！もう1人の攻撃役アタッカーのリンセだってお前の近くにいるだろ!!」

リンセとは獣人と呼ばれてる存在で多数ある種族の中でも【山猫族】の少女だった。

「確かにそうだが、あれはリンセが大技を使う時に「タメ」が必要だからいるのであって通常時はミュルやエスカと共に前に出てるだろ

？」

「ケツ、相変わらず口だけはうまい奴だな」

「いやいや、口だけうまいと言うが俺はちゃんと正論を言ってるだけだが？」

「ああ、そうかい……けどなお前を追放する理由はこれが1番なんだよ……」

ミュルは少し貯めてから口を開いた。

「お前だけが未だにレベル10のEランクじゃないか!!」

ミュルはタケアキを指差すとそう言った。

「お前がいなきや、俺達のパーティーはとっくにAランクに上がってるんだよ!!」

「ふむミュルの言う通りだな」

エスカがミュルの意見に賛成してる中タケアキはAランクへの昇格資格を思い出していた。

冒険者ギルドでは幾つのランクが設定されており上からS、A、B、C、D、E、Fと決められている。

幾つかの昇格資格がある中でこの様な資格があった。

パーティーの全メンバー内のランクによって昇格する事が出来る
と……

ちなみにAランクに昇格する為 4〜6人パーティーの場合。

・ Aランク保持者最低1〜2人。

・ Bランク保持者1〜2人。

・ Cランク保持者1〜3人。

・ Dランク以下のメンバー1人につきパーティーランクが一段下がる。

となっていた。

「なるほど……このパーティーは5人で俺がEランクでクーラとミュルがAランク、エスカとリンセがBランクだから俺がいなくなればAランクに昇格出来るって訳か……」

「そうだ、だからお前には出て行ってもらおう」

「だけど……本当に俺がパーティーを抜けても良いのか？」

「心配しなくても、お前程度のスキル持ちならいくらでもいるんだよ!!ホラ!さっさとここから出てけ!!これは俺たち全メンバーの総意なんだよ!」

「そうか、なら俺はこのパーティーを出て行くとするよ。そうだ一応引き継ぎしたい事があるからクローラカリンセに話したい事があるんだけど……」

「あの2人ならタケアキとは話したくないって言ってたぜ、だから早く出て行けよ」

「ふーん……じゃあ出て行くよ ならこの店の支払い位はやってくれないか?」

「へっ、それ位なら払ってやるから早く出て行くんだな!」

タケアキは言われた通りに店を出たがそれから少しして「どれだけ食べたんだ!!」と声がしていた。

第2話

パーティーから追放されたタケアキは宿屋の部屋で荷物の整理をしていた。

「えーつと、コイツとコレはBOXに入れて、こっちは手に持つておくか……よしっ」ガチャ

「あれ？タケアキさん？どうしたんですか？」

タケアキが部屋を出ようとした時に誰かが入ってきたので確認するとパーティーメンバーのクーラだった。

「ん？ああ、ちよつとな……」

「もしかして、何処かに行くんですか？」

「え？いや、俺はこのパーティーから追放されたから出て行くんだけど？」

2人の話はどこか噛み合ってなくタケアキの言葉の内容を理解したクーラはタケアキに詰め寄った。

「ちよ、ちよつと待つてください！なんでタケアキさんが追放されなきゃダメなんですか!？」

「いや、ミユル達から俺は役立たずだから追放されるんだけど……それにはクーラとリンセも賛成したって聞かされたけど……」

「はあ？私とリンセさんがタケアキさんの追放に賛成する訳無いじゃないですか……あの剣士……」

「まあ、ちよつと良かった、クーラに引き継ぎしたい事が「タケアキさん！私もこのパーティーを抜けます!!」へ？」

クーラの言葉を聞いたタケアキはキョトンとした表情になった。

「いやいやいや、別にクーラがこのパーティーを抜ける事も無いだろ、俺がいなくなればギルド規定でAランクになれるんだから」

「そうかもしれない……けど、私はタケアキさんと一緒にAランクになりたいんです!!」

「ふーん、じゃあ俺と一緒にパーティーを抜けるか？」

「はいっ！私はタケアキさんと一緒に行きます!!」

「なら、アイツらから何か言われる前にこの街を出るから……コレを

使うか」

タケアキは空間に手を入れると八角形の灰色のクリスタルを取り出した。

「それって、もしかして移動石ですか？」

「ああ、前にダンジョンで見つけた奴でな……けどコレは下位属だから一度行った所で一回使うと壊れる奴なんだ

それでどこに行く？」

「そうですね……なるべくミユルと顔を合わせたくないですから、この街から出来るだけ遠い場所にしませんか？」

「そうか……ならここにするか？」

「ここですか、確かにここならこの街から遠いですね」

クーラはタケアキが地図で目的地を示すと賛成した。

「じゃあ移動石を発動「ちよつと待つにや！」ん？」

「あらリンセじゃない、どうしたの？」

タケアキが移動石を使おうとした時、誰かが声をかけたので見ると同じパーティーメンバーのリンセがいた。

「どうしたの？じゃにやいにや！なんでタケアキとクーラが一緒にいるんだにや!？」

「なんでって……ミユルにパーティー追放されたからこの街から離れようとした時にクーラも一緒に行くって……」

「なっ!?!ちよつとここちに来るにや、クーラ!!」

リンセはタケアキをその場に残すとクーラを呼んで2人で話をしていた。

タケアキから離れた2人は今の事情を話し合った。

「クーラ！タケアキの言った事は本当にや!?!」

「はい、タケアキさんから聞いた話だとミユルが私達2人も追放に賛成したと言ってたみたいです」

「はあ!?!何を勘違いしてるにや!!このパーティーはタケアキがいたから今までやってこれたにや!!」

「そうですねクーラさんの言う通りです、彼ら2人は戦闘能力でしか

人を見てませんかからね……それでリンセさんも私達に付いて来るんですか？」

「そんな事を聞いたら私も一緒に行くにや！あんな奴等と行く位ならコツチの方が良いにや!!」

「そうですか……（くっ、折角タケアキさんと2人きりで過ごせると思っただのに……）」

「2人よりも3人の方が良いにや（抜け駆けさせる訳には行かないにや……）」

話を終えた2人は握手をするとタケアキの所に戻った。